
竜の花嫁

浅木 仰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

竜の花嫁

【Nコード】

N1619P

【作者名】

浅木 仰

【あらすじ】

アゼストラ大陸の西の国、ネルガーナを突如襲った眠りの病。その病がひそやかに国を蝕む時、人智を超えた知恵を求めて、いま再び竜の花嫁が選ばれた。

“喜ばなさい。あなたは選ばれたのだ——……”

平凡な村娘で終わるはずだった人生が、音をたてて軋み始める。

序章

「こんにちは」

——午後の陽射しが、奇妙に明るく洞窟の中に差し込んでいた。

その入り口で、土埃に汚れた灰色のロープを払い落とし、くすんだ金髪を払いのけた若い女が声をかける。

翡翠の視線の先で、洞窟の外の明るさとは裏腹に、中には闇が横たわっている。

小山の様に大きく、形ある闇。

目が慣れてくると、呼吸するように闇は緩やかに動いているのが分かった。

” 何用か ”

闇が問う。声は足下、地の底から這う様に低くざらついて聞こえる。怖くて膝が笑う。一歩でもあとずされば、そのまま悲鳴を上げて逃げてしまいそうだった。

” 喜ばなさい、貴女は選ばれたのだ ”

柔和に告げた司祭の声を思い出す。選んで欲しいと頼んだ覚えなんて何処にも無い。

それでも、あの日彼女の運命は既に定められた。

ならば、逃げるなんてまっぴらだった。

昂然と顔を上げて、背筋を伸ばす。震えそうになる喉を叱咤して声を出す。

「ソリアより参りました、リヴィエラと申します。

——不束者ですが、これからどうぞ宜しくお願い致しますね、旦那様」

午後の陽射しに縁取られて、娘は鮮やかに笑った。

ざわざわと村が浮き足立っている。

週に一度近くの村で立つ市に出掛けて帰って来ると、道のそここで人がたむろしてひそひそと声を交わしているのが、いやに目に付いた。

買い物帰りの女達や、或いは品の交換に出かけた男達が、立ち話をしているだけなら珍しいことではない。

けれどその日の風景は何か、どこか違った。他愛無い世間話にしては、いやに声をひそめ、まるで他のものに聞こえるのを恐れているように見える。そのくせ話さずにはいられないような。

（ また誰か死んだのかしら ）

最近この近隣の村では、やけに不自然な人死にが多い。

先々月から数えればもう、十二、三人を数えるだろうか。

年寄りや病人が生を全うして天に召されるのならばともかく、いずれも老いにも病にも縁の無さそうな若者ばかりだったと聞く。

流行病でも事故でもなく、ただ彼等はある日突然倒れて眠り続け、やがて衰弱して死に至る。

村のあちこちで祟りだ災いだと囁く声が高まり、それに応えるように、おかしな格好をした男が広場で「神の怒りを逃れたくば、悔い改めよ」と熱弁をふるっていた。

けれどリヴィエラにとっての目下の大事は、そんな事より両手に抱えた大量の芋だった。

「ちょっと、買いすぎた、かしら、…ね！」

芋に果物、野菜、細々とした生活用具など、奮発して買いこんだ物をまとめて詰め込んだ麻袋は、控えめにいつても腕が抜けそうな重さだ。

袋の口も閉まらず、ともすればころころと転がり落ちそうになる芋や果物を落とさないようにバランスを取りながら、半ば引きずるようにして村のはずれの我が家へ向かう。

生憎手元には鏡も、顔が映るような泉も無いが、あればきっと顔を真っ赤にして髪もばさばさにした妙齡の女が映るだろう。なくて幸いだ。

毎朝丁寧に梳る髪は、鮮やかなというにはくすんでいるけれど、母親譲りの翡翠の瞳は密かな自慢だ。

誰もが振り返るような美人ではないけれど、そう捨てたもんじゃないじゃない？

自分で自分に下した評価は、多分そう間違っではないはずだ。

「もっとも、こんな姿見られたんじゃ、百年の恋もいっぺんで醒めそうだけど」

ようやく目の前に見えてきた家を前に、一度立ち止まって袖で額の汗を拭って笑う。

細くしなやかな肢体は殿方の庇護欲を誘うかもしれないが、最近とみに遅しくなつて、力を入れると微妙にぽっこりと膨らんでいるように見える腕は、あまり彼らの好みではないかもしれない。

オトメの意地として、力コブとは死んでも認めたくない彼女だった。

もう一息、村の真ん中を走る広い道を十分ほど歩いて細い道に逸れた先に、弟と彼女が暮らす小さな家は建っていた。

ここから家までの坂は、緩いように見えて荷物を持っていると、意外に堪える。

袋の口に両手をかけ、気合を入れて持ち上げ、よろめきながらもよ

うやく戸口にたどり着き、両手が塞がっているので何時もの通り、声をかけてから器用に肩を使って扉を開ける。

「ただいまー！アトスちよつと来てー！沢山買っちゃって重くて持ちきれな、…………あら？」

「お帰りなさい、お待ちしていましたよ」

扉の先で、彼女を出迎えたのは、見慣れた弟の顔ではなかった。

「…………どなた様？」

柔らかそうな長い白髪を緩く束ね、幅広の布で両目を覆った司祭と、その護衛らしき黒衣の青年。

「お迎えにあがりました、”聖巫女”様」

布に覆われて見えないはずの双眸は正確に彼女を射抜き、司祭は深く頭を垂れる。

肩口をすべるその白く長い髪の流れる音が、いやに耳についた。

アゼストラ大陸の西の国、ネルガーナの首都ロスタロイドから、北西に馬で一週間。

リヴィエラと弟のアトスが暮らす村、ソリアは其処にある。

一番近い村でも馬車で数時間掛かる周囲から隔絶した場所だが、土壌がそこそこに豊かな為に、畑を耕せば何とか食いつないでいける程度の実りは得られる。

肉になるような牛や山羊を育てるのは難しい場所だが、それも近くの村に立つ市で、チーズや布などと一緒に手に入れる事ができる。リヴィエラの家には馬もロバも無いが、市が立つ日だけは村の人に頼んで一緒に連れて行って貰い、帰りは近くまで乗せてもらって後は歩きだ。

どこにでもある、中程度より少し貧しい村。

そこに彼女たちは二人で暮らしていた。

両親は彼女が幼い頃に流行病でそろって亡くなり、弟は一命を取り留めたものの、命と引き換えに両目の光を失った。

両親は元は結婚の際に親に反対されて駆け落ちしてきたらしく、この地にリヴィエラの親類はいない。

この人しかいないと思ったのと、生きていた頃の母は明るい翠の瞳を和らげ、頬を染めて娘のように笑っていた。

余所者の二人は初めは冷たく扱われたようだが、リヴィエラが大きくなる頃には、父と母の屈託の無い明るい性格のお陰か、少しずつ

村の人たちとも交流を持ち始めていた。

その甲斐あって、弟と二人きりの生活は貧しいけれど、村の人の厚意もあって何とか食いつないでいる。

どこにでもある村の、どこでもある家。

けれどそこが、たった一人の家族と共に暮らす、彼女の大切な「世界」だった。

「此処数ヶ月で、奇妙な人死に出ているのをご存知でしょうか」

粗末な木のテーブルについて、お茶を出そうとした彼女を止めて座るように促し、遠く首都ロスタロイドから来たという盲目の司祭は話し始めた。

異国の出に見える浅黒い肌と、それに映える白い髪。幅広の布のせいで瞳は見えないが、視覚を補う様に細い杖を突いている。

瞳が見えない所為だけでもないだろうが、奇妙なほどに司祭は年を感じさせない。

落ち着いた声音と物腰は既に四十を越えているようでもあったし、滑らかで張りのある肌は二十を幾つか過ぎたばかりだと言われても頷けるだろう。

「はい。…突然倒れて眠り込んだかと思えば、そのまま眠り続けて…やがて死に至るとか」

「その通りです。実はその病が流行っているのは此処だけではありません。一年程前から各地で同じ様な病で亡くなる者が増え始め、

二月ほど前に、国王ゼカリア三世様のご実子、第三王女のエストーネ様までが病でお亡くなりになりました。そうしてついに一月前に、王妃様までがお倒れになられた」

淡々と語られる言葉に曖昧に頷いて眉を顰める。

彼女の世界は狭い。王都など遙か遠く、恐らくは一生行くはずのない場所だ。

王様や王女様という言葉に馴染みがあるはずもなく、司祭の語る言葉は別世界の話か異国の言葉に似ていた。

「それはその、…お気の毒だと思いますが」

曖昧に言葉を選ぶ。相手が王様や王妃様でなくとも、だれかが病に倒れたと聞けば、実感は無くとも治って欲しいとは思う。

国を治めるひとだからという意識よりも、社交辞令より幾分真心のこもったに過ぎないことば。

一大事だという事は分かるが、遠く王都から何故ただの村娘の家に司祭が来るのかが分からない。

せっかちなきらいのあるリヴィエラの性格を見越した訳でもあるまいが、声からそのような色を感じたのか、僅かに口許を緩めて押し止めるように片手をかざす。

「もう少し黙って聞いて下さい、貴女にも関わる大事なお話ですから」

弟相手なら腰に手を宛てて、とつくに「回りくどい！」と怒鳴っているところだが、まさか司祭を相手にそれをする勇氣も無く、ぐ、と黙り込んだ。

というよりもこの何処かつかみどころのない司祭さまなら、怒鳴られても飄々と笑って「すみません」と詫びそうだが、後ろに控えた黒尽くめの青年の無言の圧力が怖い。

引き締まった長身は、ゆったりとした服の上からでもムチのように敏捷な体型が見て取れる。

目深に下ろしたフードからは口許しか見えないが、こちらも司祭と同じ様に未だ若い様に見えた。

ひっそり佇む姿は影に似て、長身の割りに意外な程静かに動く。

強くしなやかな獣を思わせる体は、事あれば一瞬で標的の息の根を止めるだろう。

平和な村で生まれ育った身には想像もつかない、影の世界を思わせる。

「続けて宜しいですか？」

「…失礼しました、どうぞ」

影の様な男に気を取られていたのを見透かすように掛けられた声に、はっとして詫びると気にした様子も無く司祭は再び語りだした。

「今は何とか、城の薬師達が総力をあげて王妃様のお命を繋いでおります。幸か不幸か、この病は眠りに似て意識を失うだけで、他に異変がある訳ではありません。栄養価の高い薬草などをすり潰して水に溶かして液状にし、少しずつ飲んで頂くことでお体を保たせておりますが、所詮は一時凌ぎに過ぎません」

寝ているだけとはいえっても、生きているだけで人は体力を消耗するのだ。

ろくに食べ物も摂れず、動くことも出来なければ——遠からず王妃も、死者の列に名を連ねることになるだろう。

淡々とした声の告げる事実の重さに、相槌も打てずに黙り込む。

「王妃様のお命を繋ぐ傍ら、勿論薬師達も不眠不休で原因を探りましたが、いっこうに原因が分からない。困り果てた陛下は、我が師である大司教ヒーレングリアに、此度の奇病の原因を占じるようにお命じになりました。それを受けて我が師は三日三晩聖堂に籠り、四日目の朝、ついにラジウルスト大神の託宣を得る事が出来ました。これは即ち、竜の怒りである、と」

「竜——……？」

あまりに唐突な話についていけず、混乱する頭を整理するように額に手を当てる。

「ちよつと待つて下さい。竜って……大昔に生きていたっていう、翼の生えた大きなトカゲみたいなあれ？だつてあんなの、ただの子供騙しのおとき話でしょう？」

「おとき話ではありません。確かに数は非常に少なく、その存在ゆえに一般には秘されていますが、竜は確かに存在します」

”良い子にしていないと竜が攫いに来るわよ”

子を持つ親なら一度はそう言つて脅かしたことがあるだろう、伝説の中に生きる生き物。

その考えを、司祭の穏やかながら平淡な声音が無情にもあつさりと否定した。

「エミユルンド山脈をご存知ですね？何故あそこが、”不滅の砦”と言われるか考えたことはありませんか」

また唐突な言葉と共に、司祭が背後の黒尽くめの青年に合図すると素早く動いた青年は手品の様にテーブルの上に地図を広げた。

エミユルンド山脈。

此処からだど丁度南、隣国アルバティスタとの境に横たわる広大な山脈を司祭の白い指がなぞる。

今は近隣の何処の国とも不戦条約を交わしているが、その昔小競り合いが絶えなかった頃にも、あの山がわたしたちを守ってくれと言われていたという。

「それは――…良く知らないけれど、軍隊が通れるような山ではないから、では…？」

「確かに冬になれば深く雪の積もる地ですし、軍を進めるのに向いた地とは言えません。ですがそれだけなら雪解けを待てば済む事ですし、何よりあそこから攻め入られれば、王都はすぐそこ。ぐるりと回って海路から攻め入るよりも、大幅に時間の短縮になります。」

――けれどそうしたくとも出来なかったのは、雪よりももっと厄介で、恐ろしい脅威がそこにある事を各国の王族は皆知っていたからです」

「…脅、威」

問うよりも確かめるに近い響きで繰り返せば、司祭は静かに頷いた。

「竜です」

エミユルンド山脈には、古より竜が棲んでいるのだと。

今より丁度五百年前のことだと、司祭は語った。

我が国に奇妙に眠り込む病が流行った。

この病に罹った者は、突如として眠り込み、目を醒ましたかと思えばまたすぐに意識を失う。

段々と意識を取り戻すまでの間隔は長く、目を覚ましている時間は短くなる。

どんなに手を尽くそうと、意識を失っている間は自然に目を開けるまで目を覚ます事はない。

食事もうろくに摂れず、床につく時間が多くなれば体は弱り、やがて死に至る。

国中を襲った病は、やがて城の中で嚴重に守られていたはずの王子や王女達、ついには王その人をも襲った。

原因が分からない以上薬師に出来るのは、ほんの僅か命を永らえさせるだけ。

このままでは国中の民が死に絶えてしまうかと思われた先に、一人の若き司祭の必死の祈りが神に通じ、「竜の知恵を求めよ」という託宣が下されたのだと言う。

「しかし本当は、神の託宣はこう続いていたのですよ。」その知恵を得る為には、引き換えに、選ばれし乙女が竜の花嫁とならなければならぬ」と

「……………」

ゆつくりと瞬いた先、窓から差し込む陽射しが作る影が、不意に色濃くなつた気がした。

「五百年前に、花嫁として選ばれた乙女の名は、セシリア。若き司祭から託宣を聞いた彼女は、彼と共にエミユルンド山脈に赴き、竜の花嫁となつた。そうして引き換えに司祭は、人を遙かに超える長き時を生きる竜の知恵を授かつたのです。数多の苦難を越えて聖巫女をエミユルンド山脈に送り届け、秘薬の知恵を持ち帰つたその司祭の名はゼクストス——後の聖国教会の始祖です。そうしてセシリアの名は聖巫女として、教会のごく一部のみに秘して語り継がれた」

「……どうして？」

「聖巫女がそう望んだからです。竜は人にとって大いなる脅威であり、強大な力はいつそ天災といった方が正しい。一度竜がその気になれば、この国どころか大陸全土の国が束になってかかるうとも、恐らく勝てる見込みはないでしょう。そんなものの存在を、民草に知らせる訳にはいきません。だからこそ、国を奇病から救つたのはラジウルスト様の下された薬であり、始祖ゼクストスであるとしたのです」

「これが、聖巫女セシリアの似姿です」

「……………」

地図の上に広げられたのは、年の頃は十七、八の娘——鏡に映した様にリヴィエラに似た姿。

「彼女は柔らかな金の髪に翡翠の瞳、……そして花に似た痣を持つていたそうです」

咄嗟に左肩を手で抑える。全身から冷たい汗が噴き出した。

布に覆われた司祭の両目が彼女の左肩に注がれているのを痛い程に感じる。

今まで部屋の片隅で影に同化する様に佇んでいた黒衣の青年が、音も立てずに歩み寄るのを視界の端に見て取り、弾かれた様に椅子から立ち上がろうとすると、容易く距離を詰めて腕をとられた。

「、嫌っ！」

「失礼」

夏に近い陽気の中、暑いと言いながらも頑なに半袖になるのを拒んで、袖を通し続けた長袖の下――花に似た痣が、そこにはくつきりと表れていた。

腕をとられたまま蒼白の面持ちで立ち尽くすリヴィエラに向けて、司祭はいっそ仮面のような穏やさで語り続ける。

「喜ばなさい。貴方は選ばれたのです」

そして今再び――“国を救うべき” 竜の花嫁” は選ばれた。

気がつけば夕陽はとうに窓の外に沈み、青い闇の中にちりちりと虫の音が響いていた。

「事は一刻を争います。今夜一晩お時間を差し上げますので、明日の昼までに心の整理を済ませておいてください。エミユルンドへ向かう為に必要なものは全てこちらでそろえてありますので、貴女はただ身一つで来て下されば良い」

リヴィエラの意思などまるでお構いなしに、司祭は告げた。

実際この国全と、とりわけ国の母とも言える王妃の命を救う為に一刻を争う今、一介の村娘の意思になど構っている余裕は何処にもないのだろう。

「ああ、…それと、ご安心ください。弟さんは今後、聖国教会が責任を持って、面倒を見させて頂きますので」

弾かれた様に司祭をきつく睨みつければ、まるでそれが見えている

ように司祭は柔らかに笑ってみせた。

言葉にされずとも伝わる、明らかな脅し。

”弟の命が惜しければ、大人しく従え——……”

リヴィエラに残されたたった一人の、誰よりも大切な家族。
見殺しにできるはずのないもの。

悔しさに血が滲む程きつく唇を噛み締め、思いきり拳を木のテーブルに叩きつける。

骨が軋んだが構いはしない。

骨が折れるなら折れてしまえばいい。

国を救うという大儀の名の下に、彼女がこの手で守ってきたものは
今全て奪い去られようとしている。

リヴィエラ自身、彼女の意思、尊厳、弟との暮らし。

司祭の言葉は、彼女の道は、既に彼女の与り知らぬ所で違えようも
無く定められたことを物語っていた。

一晩かけて、食器などを除いて彼女が使っていた細々とした私物を全て火にくべた。

残されたアトスは教会の庇護の元、都で暮らす事になると言う。
ならばこの家はもう、必要ない。

誰とも知らぬ人の手で処分される位なら、自分で処分した方がよほどマシだ。

東の空が明るみ始め、太陽が中天にさしかかる少し前に、司祭は馬車に乗ってリヴィエラを迎えにきた。

見えずとも辺りに立ち込める焦げ臭い匂いは感じていただろうに、
柔和な笑みを毛一筋も揺らさぬままに彼女を促す。

「お迎えにあがりました、リヴィエラ様。さあ、こちらへ」

「…その前にアトスに会わせて」

一歩も譲らぬ瞳で低く言えば、暫し考えた後に存外あっさりと司祭は頷いた。

「お別れに連れて来てくれなかったわけ？」

暗に気が利かないと匂わせ皮肉に唇を吊り上げると、

「眠っておいでですので」

「寝てる…？」

「はい。どうしても貴女様が聖巫女に選ばれたということがご理解いただけませんでしたので、少々薬で眠っていただきました」

「…アンタ、どこまで人を馬鹿にすれば、！つつ離して、離しなさいよ！！」

柔らかな笑顔を崩さずこともなげに答える司祭に、顔色を変えて食ってかろうとするリヴィエラの腕を、いとも簡単に黒尽くめの護衛が取り押さえる。

文字通りの永遠のわかれ。

今を逃せばもう会えないというのに、言葉を交わすことも許されない。

「どうなさいます？夢うつつに声は届くかもしれませんが」

ギリリと齒を食いしばって司祭を睨みつける。

視線で人が殺せるのならば、今すぐこの司祭の心臓を射抜いてやる。そんな覚悟を知ってか知らずか、うつすらと笑って司祭は首を傾げた。

車輪の軋む音と馬の蹄の音を立てて、馬車が止まり御者が恭しく扉を開ける。

後ろを黒尽くめの護衛に固められ、司祭に導かれて二階の部屋に足を踏み入れる。

「アトス！」

寝台に駆け寄ると、弟はぴくりとも動かずに静かに横たわっていた。口許に手をかざせば、ゆっくりとした呼吸がてのひらをなせる。

ようやく肩の力を抜いて、横たわる体のすぐ横に座り込む様に腰を下ろした。

光の加減のせいかな、この十九年間見慣れた弟の顔は、いつもより蒼褪めてみえる。

手を伸ばし、そうつと頬の線をたどる。

彼の知らぬところで彼女が旅立ったと知れば、きっと彼は酷く傷つき、嘆くだろう。

五つ年下の、彼女の大事な弟。優しすぎるほどに優しい、たった一人の家族。

「顔を上げて生きなさい、アトス」

村人から父と母の命と引き換えに命を永らえたと言われて、俯いていた姿。

目が見えないから役に立てなくて、苦勞をさせてごめんと、いつもどこかすまなさそうに笑っていた。

「誰にも恥じる必要なんて無いの。父さんと母さんが死んだのも、目が見えないのも、そんなの何一つあんたのせいじゃないわ」

生活は教会の庇護があると言っていたが、口さがない人々から彼を守る者はもういない。

これからはアトスは自分で自分を守らなくてはならない。何よりも彼の心を。

「泣いちゃだめよ。負けちゃだめ。自分を責めてうつむいたら負けよ」

他人にではなく、自分への負け。

俯いたら、見えるものも見えなくなる。そうして顔をあげることをわすれれば、いつか誰よりも自分で自分をあわれむようになる。

薬で落ちた深いふかい夢のなか、声が届けばいい。どうか忘れないで。

「あんたは世界で一番、最高の弟よ」

あいしてる。

そして、さようなら。

「時間です」

司祭の声が時を断ち切る。
それが、別れだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1619p/>

竜の花嫁

2011年1月8日14時44分発行